

【第4回松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会 発言録】

(敬称略)

開催日時 平成30年1月23日(木)午後1時30分から午後4時まで
場 所 松本市立博物館2階講堂
出席者 松本市基幹博物館建設検討委員会展示専門部会
菊池健作委員、後藤芳孝専門員、櫻井多美江専門員、
笹本正治委員、関悟志専門員、原昭芳専門員
乃村工藝社(設計JV)
稲垣プランニング担当主任技術者
事務局(松本市立博物館)
木下館長、関沢課長、中原課長補佐、船坂課長補佐、遠藤主任、
堀井主任、高山主事、千賀主事

1 部会長あいさつ

菊池：こんにちは。本日は12月の会議の時に指摘があった点を踏まえて修正がされておりますので、それらを確認しながら展示計画について検討していきたいと思っております。ご協力よろしくお願いいたします。

2 議題(1) 展示計画について

事務局：(説明)

菊池：展示計画をご覧になった上でご意見ご質問がありましたらよろしくお願いたします。

では私の方から「山・水・道」の見直し後の大テーマ「開かれた」の「開」ですが、これは「拓」ではなく「外向きに開く」という事を意識したものでしょうか。

事務局：はい。「拓」だと「開拓」のイメージになってしまいますので。

菊池：わかりました。

関：展示計画の中で21ページの「開かれた盆地」の部分ですが、「温泉に集う」「街道のにぎわい」「山とともに」と3つ中テーマがありますが、開館時には「温泉」「街道」の2つのみ展示し、いずれまた「山」は更新をしていくということでテーマが設定されているということでよろしいでしょうか。

事務局：はい。19ページをご覧いただければと思いますが「常設展示更新のイメージ案」で、まだこの年数で決定ではないですがイメー

ジとして、いまご指摘いただいた「開かれた盆地」が大テーマB、この内、中テーマ1と2がそれぞれ「温泉に集う」と「街道のにぎわい」開館時にはその2つを行いまして一定年数が経ったところで、例えば、開館5年目のところで「温泉に集う」に替えて「山とともに」の展示に切り替えて5年目の段階では「街道のにぎわい」と「山とともに」が展示されているというイメージを持って進めております。

後 藤：展示計画の修正のところですが松本まるごと博物館構想があってその具現化としてソフトとハードの事業があって、ソフトの事業の中に歴史文化基本構想が付いてくるこの図式でいいのかどうか、どうしてこのような考え方をしたのか教えていただきながら館長のご意見をお聞かせください。

木 下：着座のままで失礼させていただきます。

松本まるごと博物館構想が松本市全域を博物館に見立てるということでして、それが「松本市全体が屋根のない大きな一つの博物館です」という考え方です。

基幹博物館がハードとなるというのは活動拠点として整備をしていくということ、私どもの博物館は展示計画の2ページのところで説明をさせていただいたとおり、すべての性格が一緒ではなく小さな博物館なイメージのところと文化財を保存活用していただける、特に展示機能を重視していないものというようなことに分かれるので、この説明だけだと少し該当しない分館も出てきてしまうんですが、基幹博物館を含め私どもの分館を文化財保護の活動拠点だというイメージで整備をしていくのでハード事業だと。

一方で歴史文化基本構想で松本市全体を博物館に見立てると、そこにあるものは博物館でいえば、すべて資料だということになっていく。その資料を使って、例えば特別展をしていくようなイメージを描いていただければと思うのですが、「その資料コレとコレとコレを使うとこんなストーリーでこんなことを紹介できるのではないか」そういうようなものが歴史文化基本構想でいうところの関連文化財群にあたるということなものですから、関連文化財群として住民の皆さんに調査をしてまとめていただいたものの中で一定の基準を満たしたものを松本文化遺産ということで行政も関わって保存活用していく、そのための構想ということなのですけれども、そういう風になったものを博物館としても保存活用、特に導入展示の辺りというイメージが強いですが、そういう

ことで活用していく。そんな連携をとっていくということでこのような図を示させていただいたということです。

菊池： 前回の会議で申しあげたのは市が同じような対象に対して、一方歴史文化基本構想を作って一方で基幹博物館構想をまとめているので、これについて齟齬(そご)が生じないように調整を図るべきだという意見を申しあげました。

この考え方については、今までの考え方を整備されたと思うので、私としてはあれこれということはないですが、ただこれはまだ見えてない部分です。文化財保護の改定をしたいという中で歴史文化基本構想をまとめているところは歴史文化基本計画の改定がまとまった後には変える、なおかつそれについても事業計画をまとめるのが歴史文化基本計画であって、その認定を受けたら補助事業として補助金を少し出しましょうという話だったと思うのですが、これについてこの考え方、基幹博物館構想のハード事業だけそれからソフト事業が歴史文化基本構想という枠組みは木下館長の説明通りで博物館としてまとめられたものだと思いますけれども、こういった仕事の分けというよりは、むしろそれぞれが対象しているもので計画に不都合が生じないように調整を図っていかなければならない。私としてはそこだけです。

笹本： 大きくいうと行政の方がどういう風にしたいかによって我々委員会があつて我々がこうしたいからという上に行政の持つべき方向、市民の文化を上げていく方向というのをどのように役割分布させていくか、それがここで明確になったということに対して齟齬(そご)はないと思います。

菊池： ちょうど高岡が同じような形で博物館をつくったときにあの建物が10年建築の一番外れの規制のかからないところにつくったんです。そのときに、たまたま計画を読んだら同じものが全然違うような仕事をしていました。

そういうことが起こると混乱のもとなので、あらかじめ歴史文化基本構想の中でどのように評価をしてどう考えているのか確認し、そのままでいいものはそのままでもいいし、困るものは調整をした方がいいのではないかという風に思いました。

木下： 菊池部会長がおっしゃったように歴史文化構想が根本的に文化庁の考え方を変えていこうとしている部分についていけるのかというような話はまたあれなので、現状策定を始めたときの考え方という形でお示しをしております。

補助事業を見据えた文化庁の変わり方にはどうやって対応するかまでは、いま見えていないところです。

菊 池：あまり盛らない方がいいのではないかという気はしています。

木 下：補助事業をやっていかなければならないものはどこかでしっかり位置付けして、もらえるものはもらっていかなければいけないというのがあるんですけども、そうでない部分は元々のところをうまく活用できるような制度だったのではということと理解しています。

菊 池：これまで積み上げてきた計画と矛盾しないように計画を調整していけばいいのではないかと思います。

笹 本：どうしても前回のことが気になるのですが、テーマ名称の見直しで、「お城のあるまち」そして近代編が「変わりゆくまち」と書いていることが相変わらず「まち」であって合併したところが入ってきていない。「お城のあるまち」は城下町なのでこれが中心になるという意味では問題ないと思いますけれども、「変わりゆくまち」というところは書かれていることもそうだけれど、例えば「変わりゆく社会」にした方がいいのではないかと思います。

イメージなのかも知れませんが「旧来の城下町としての松本」だけではないところがどうやって出てくるかという中で「まち」が2回出てくることに違和感があります。

菊 池：これは12月の委員会の時にご指摘をいただきました。

今回そこはどういう風に考えていらっしゃるかご説明できますでしょうか。

木 下：タイトルの「まち」ということでこだわりを持って検討しなかったのですが、例えば「廃仏毀釈」と言った時には「まち」だけではなくて合併地域において広く展開できるのではないかと、あるいは「蚕糸と松本」というようなところも同様なのではないかとイメージを持っております。

平成の合併からすでに10年以上も経っていることもあって、あえてそこまでこだわらなくてもいいのかというようなことも考えてきた中にはありまして、「まち」ということに対して深く意識して言葉を選んでいませんが、ご提案をいただいたような「社会」というようなことであればニュアンス的にも私たちが言おうとしていることとは違わないかと思います。あとは与える印象ぐらいのことかと思えます。

笹 本：例えば、大村地域の人たちは合併したいまでもまちへ行くといっ

たら松本へ行くことというイメージがあって「まち」の概念に「都市」というイメージとセットになっているから、大きく社会が変動したと近代のところで言いたかったならば、言いたいことは同じかもしれませんが、「社会」の方がいいだろうと思いました。

「まち」とやること自体が松本らしくないのではないかと、すでに一番最初にあげているのでいいのではないかとただけです。

もう1点いいのでしょうか。7ページのところですが、こういう使い方はいいのでしょうか。「お城のあるまち—松本城が語りかけるもの」で「松本市は、古代以来、日本史上でも地域の要地として見られていた」これも本来でいうと現代の松本市域を何とかしないと市がそのまま存在しているわけではなく地域論だと思うので、言葉の使い方を少し注意しておいた方がいいように思います。

菊 池：そこはよろしくお願いします。

今の大テーマの見直しの提案に対しての意見が再度ありましたのでこれをどうするのかは、引き続き具体的に展示計画ができてくるまでに考えておかなければと思います。

原：2ページですが「基幹博物館の展示の位置付け」で一覧表を出してもらっていて、このように分担するとあります。その中で、変な言い方になりますが、基本的に松本市立博物館の展示のスタートは松本城です。そのことをもっと出してもいいんじゃないかと思えます。本来松本市の博物館って開智学校があってすべての文化財とくっ付きながら生きてきたと思うので、そういうところの部分機能を打ち出してもいいんじゃないでしょうか。

ただ上に乗っかって全体を俯瞰（ふかん）するのではなくて、それが1個ずつあってもいいんじゃないかと思えます。ただ上に立つのではなく、「そういうところを分担するんだよ」という部分もあった方がいいんじゃないかと。そうしないとやはり松本城から始まることを強く打ち出してもいいんじゃないかと思えます。

どのくらい観にくるかといえば、松本城をメインにせざるを得ないと思えます。多くの方が観にくるのはその部分だと、だからそれを出していいんじゃないか。そうしないとただ上に乗って「時代」のところに「全般」と書いてあるけれどそこを強く打ち出した方がいいんじゃないか。そうじゃなければこれで出されても整合性が取れないんじゃないか、そういう風に思えます。

菊 池：というご意見ですが、ご指摘も踏まえてご意見があれば。

木 下：この一覧表をどうするかという部分について時代的には「全般」

という部分は特に変更しようがないのかと思うんですが、展示の内容につきましては一覧表で整理をする方がいいのか、文書の部分で直す方がいいのかですけれども、確かに1つの大きなテーマとして松本城を扱っていくということであるので、その部分は表現ができるよう検討していきたいと思います。

菊池：4の(1)のところなんです、具体的に分館の機能の例示があってその前段に「14の分館とともに機能していかなければならない」とあるんですが、その次の第2センテンスのところのまとめりとして、分館の機能が説明されているだけではなくて、基本館と基幹博物館とそれから分館との協力関係をここで謳っておけば、原専門員からご指摘があったことが分かりやすくなるのではないかと思います。

基本的には「まるごと博物館構想」というのは全体を見渡すというか全体を貫く理念があるということがわかりました。

いま松本市の各博物館の紹介のところに松本市立博物館は基本的に松本城をもう少しメインにスタートにするということを入れた方がいいということで皆さんのだいたいのご意見でいいのかと思うんですが、それを踏まえてもう1回方向を少し作っていただきたいと思います。

他に何かご意見ございますでしょうか。

後藤：4ページのところの「負担感なく松本のことを学ぶことができ」とあるんですが「負担感」というのは何に対してでしょうか。なくてもいいと思うんですが。

事務局：イメージしていたのは、例えば解説を読んでいる車イスの乗られている方の目線、ユニバーサルデザインなどを含めての「負担感なく」と表記しました。ここに書いてあることでかえって分かりにくくなるのであれば、後の方で詳しく書いてあるので除けてもいいかと思うのですが、意図としてはそういうところに入れてあります。

後藤：「負担感」というのはそれぞれの価値観があるのでご検討ください。

事務局：はい。ありがとうございます。

菊池：よろしくお願ひします。他にありますか。

展示計画についてはいまのようなご意見を踏まえてご指摘があったところを再度検討するというところでよろしいでしょうか。

1つだけ要望ですが、文章の方をしっかりと見直しておいてください。ご意見がないようですので次の議題へ移ります。

3 議題(2) 常設展示の詳細について

事務局：(説明)

菊 池：いまの説明に対して、ご質問ご意見あればお願いいたします。

笹 本：教えていただきたいんですが、大テーマ「お城のあるまち」の中テーマの3つ目「城のまわりでーマチ・ムラ・ヤマ」がありますが、この片仮名での表記が民俗学的な一定の概念を持っている言葉のような気がするのですが、平面図の昔のパターンでいくと町と里と職人というように具体性が分かるのに対して、片仮名の「マチ・ムラ・ヤマ」だと一般市民は違和感を覚えるのではないかと思います。

例えば、私たち歴史学では漢字・民俗学では必ず片仮名。そのような意図があるのかを教えてください。

事務局：私の方で意図を持ってふりました。ただ、そのときの考えが民俗的な用語の片仮名表記というよりは、どちらかというと、例えば展示計画で「モノ」を片仮名で表現しているときに、実際に目に見える物質としての「物」は漢字で書き、抽象的な概念を含みかつ目に見える物質も含めていいあらわしたいとき「モノ」と片仮名表記をするということで、一般的なルールでなく私のルールでの書き方になってしまい申しわけありませんが、その延長線上で「マチ・ムラ・ヤマ」と表記しております。

笹本委員からご指摘いただいたとおり、以前の「町と里をつなぐ」で使っていた時には漢字を使っておりましたので、まだ考えが徹底していなかったもので、ご意見をいただきながら見直ししていきたいと思います。

笹 本：個人的にはやはり漢字の方が分かりやすいし市民の人たちもそうだと思います。いまのルール決めはこちらであって、社会一般のルールの認識としては漢字や平仮名に概念があったりするものだから分かりやすい方がいいだろうと。城のまわりに町があつて村があつて山があるんだという例からしても、私は一般概念でつないだ漢字の方がいいと思いました。

菊 池：実は大きな問題だと思っているんですけども、いまの表記の問題はいかがでしょうか。

木 下：多くの人が違和感なく受け入れられるものにしていかなければいけないだろうという部分が考え方としてはそういうことなんですけど、ではそれが漢字でいいのかという部分は、私としてはまだ整

理できていないです。片仮名よりは漢字なんでしょうけれど、漢字を使った時にもっと特定で誤解をされてしまうのかと思う部分もあるので「概念」というものがうまく伝わるかという心配は持ちながらいますので、申し訳ありませんが即答できる準備がいまはありません。

ぜひ皆さんのお考えを聞かせていただきながら決めていければと考えておりますので教えていただければと思います。

菊池：この「マチ・ムラ・ヤマ」のように片仮名表記の問題については民俗学ではずっと片仮名表記をしてきたのですが、実際には片仮名表記されますと意味が分からないみたいなことがあります。

一方で漢字を使うと使われた漢字の意味での概念が形成されてしまう。例えば、「マチ」という言葉でも「町」や「街」を充てる時でそれぞれの意味が決まってしまう、そういう問題もあると思っています。こここのところの趨勢（すうせい）では私の認識では民俗学の文章でも漢字を使いつつあると思っています。

ただ、今回は堀井さんからの説明で「民俗学で使っているから使った訳ではありません」ということでしたので、その辺の妥当性についてはこれからまだ変わる可能性があるのでコンプリートではなく、これからの作業の中でどう使うかを考えた方がいいのかなと個人的には思っています。

他の方ご意見ありましたら、お願いいたします。

櫻井：片仮名だと違和感があります。平仮名だとまだ受け取り側の可能性はあるのでしょうか。大テーマの「まち」は平仮名ですし漢字はいろいろな取られ方があるので平仮名の方がいいかと思うので統一した方がいいのではないかと思います。

菊池：そうだろうと思います。用語や表記は統一すべきだろうと思います。片仮名についてはこだわりがある人はこだわりがあるので、なかなか聞いてくれないことが多々あるんですけど。

ご意見いかがでしょうか。

関：先生方がおっしゃる通りだと思いますし堀井さんもかなりご苦労されてこのように位置付けされたのだと思いますが、統一するか「お城のあるまち」「変わりゆくまち」「市民が担うまちづくり」のところがあります。地域づくりの意味合いかと思いますが「まち」や「むら」「やま」を特に言っているのではないとすれば一般の方がイメージしやすい表記に検討していただければどうかと思いました。

それから「モノから学ぶ」は、たぶん博物館資料という意味での片仮名表記だと思いますので個人的にそこはいいのかと思いましたけれども、そこは「何で片仮名なのか」とすぐに分かりやすいような脚注がある中での説明があってもいいのかと思いました。

菊 池：ありがとうございました。

この問題については、ここで結論が出るとは思えませんので実際に展示が発注になる頃までに意見としてまとめられるよう検討を進められていただければいいのではないかと思います。

全体としては関専門員からのご指摘にもありましたけれど、何をどう表現するか、例えば、博物館で扱っているものを表記したときにその資料全体を形のあるものを片仮名で表記するのであれば資料は「モノ」として表記をする。「モノ」と「コト」を片仮名で書いた時に「コト」は行為であるという説明も付くけれども、そういったものも含めて少し表記の仕方をよく考えていった方がいいでしょう。

それとやはり「誰が展示を見るのか」を考えたときに子どもさんも見ますのでより分かりやすい表現ということも考えなければならぬと思います。そういった意味で更に検討を進めて欲しいというところです。

笹本委員からご指摘があった点については今後さらに統一がとれるか、あるいは表記をどうするのかを含めて検討を進めていく。

時間的にはいつ頃までに仕上げればいいのですか？

事務局：部会長からもありましたが、展示の関係で着手する中でパネルなどを考えていくといったときには、展示の実施設計が決まるときに用語についてはある程度見えていないと、ということになりますので実施設計提出期限が平成30年の12月末を予定していますので、そこがタイムリミットと考えています。

菊 池：時間的には少し余裕があるのでじっくり考えて、そうじゃなかったというようなことがないように検討していただければと思います。

他にご意見などございましたらお願いします。

では、意見ではなく質問です。先程の展示計画の説明の中で、頻繁に展示を更新するという方針が示されていましたが、松本市基幹博物館整備事業の平面図を見てみると、各展示室に家具付きケースを置くと書かれていますが、この家具付きケースの存在と平面図の中にある展示台あるいは低い展示ケースも入ってくるんだろうと思うんですが、こういったものをどう使うかを十分に考えてい

かないと、頻繁に展示替えはできないんじゃないか。

要するに、展示装置に合わせた資料しか入れ替えることができなくなる危険性を持っていますので、展示替えを制約されないような展示替え、展示装置を考えていって欲しいと思っていますが、その辺はすでに考慮されていると理解してよろしいでしょうか。

事務局：部会長からありましたケースの件については具体的な寸法についてもう少し具体性を詰めてというところでまだ足りていない状態ですが、交渉をしていく中ではケースのことは考えていきたいと思えます。

併せて展示の什器について、検討をしている中であるのが露出展示時の展示台は例えば、「〇〇という展示品のために設計はして欲しくない」と何度も伝えていますが、ではどうすれば汎用性ができるかということを経営者と展示の什器の関係では話をしております。

それから、コーナーの間仕切りの仕方も可動で移せるような箱壁といったようなものを考えているといった中で汎用性の話をしながら検討をしていますが、ケースまでは組み込めていないので気を付けていきたいと思えます。

菊池：展示台それから展示ケースをどのように使うかどこに置くかによってストーリーの展開まで左右されますので、そこは注意して資料を置き換えるだけではなく、展示のテーマ毎に組み替えられることを前提にやらないと、実際にできあがってしまったら直せないと思えます。

展示台は作り変えることができてもケースは外せないなので、その点を計算に入れてやっていただきたいと思えます。

後藤：平面図の方へ話を戻します。設計業務で分からないところがあります。赤文字で「松本城」と書いたところがありますが中央は吹き抜けですか。

事務局：ここに新たにジオラマを作りたいと考えておまして、ジオラマを置く部分と考えていただきたいと思えます。

後藤：右側の壁の方に「壁面グラフィック」というのがあります。ここには具体的に何が出てくるんですか？

事務局：考えているのは新しい城下町のジオラマに対応して、実方位とは逆になりますがアルプスの山並みを描いて関係性を示したいと思えました。

後藤：変化するという事ではないということでしょうか。面積が広い

のにもったいないですね。

事務局：山並みが描かれています、資料なども付けられるよう部分的に壁付けのケースを設けて画だけではなく展示もしていく予定です。

後 藤：南の方へ行って、例えば「トピック展示」の上側も壁面でいいですか？

事務局：はい。

後 藤：それから「継承」と書いてあるところの左側は可動式のパーテーションという意味でいいですか？

事務局：はい、そうです。

後 藤：それから薄黄色の通路の「山水道」のところの茶色の仕切りはここで区切るのですか？

事務局：はい。設計者からそのような提案をいただいているんですが、これについては来館者の目線などを考え再検討しているところです。

後 藤：「体感ゾーン」の丸と四角は机が置かれるということですか？

事務局：ここで腰を据えて少し体感することができるように設けたいと思います。

後 藤：各部屋の入り口に「モノライズ」というものがあるんですが、これは何ができる部分ですか？

事務局：それぞれの中テーマを象徴する一資料に焦点を当て展示をします。来館者側から見たときに、目を引くものとして考えたものが「モノライズ」です。

後 藤：ガラスケースに入っていて触ったりできるものではないということ？

事務局：そこに置くものを考えているのですが、例えばレプリカを考えていて素材感までを含めてレプリカを触っていただこうと考えています。必ずしもガラス・アクリルケースが付随するということではありません。

後 藤：それから真ん中に「探求の井戸」があるんですが、ここはどんなスペースがあるんですか？

事務局：ここはまだ具体的な資料が付けられていません。「探究の井戸」と赤く書かれたところの下に小さな字で「休憩」と書いてありますが、休憩スペースを設けたいと思っています。

ただ腰を据えてというだけでなく中テーマに関する写真などを展示することで、まだお示しはできませんが興味を引くきっかけになるような工夫を検討しています。

後 藤：椅子や机みたいなものが置かれるということですか？

事務局：はい。

後 藤：それから一番最初のお話のときに、長い展示スペースなので入ったところからずらっと見通しが利くと説明があったような気がするんですが、これを見ていくと、例えば松本城の城下町のところから奥に入っていくと行き止まりみたいな感じになって人の流れが最後に詰ってしまい動線としてはまずい流れではないかという気がするんですが、先ほどの堀井さんのお話しでは仕切りを作るということなので奥が見えない長い廊下があるというイメージになるんですがその辺はどうなんでしょう？

木 下：真ん中の「体感ゾーン」のところはまっすぐ奥まで行くんですが、観覧していただく順番として私どもとしてはこのテーマでいくと「山・水・道」、「近代化」、「ものづくり・暮らし・学び」、「祈りと祭り」という順番でまた戻ってきて「継承」のところを通り共通の出入り口を通して感想を聞かせていただきながらお帰りいただくという順路を想定しているということで、そのときに先ほど申しました、それぞれの丸の後ろのつい立てが視界を妨げるだろうと思うので、それをもう少し小さくしていこうかと考えています。

それと少し向きを変えて展示室の中に入りやすい自然な動線に変えていかなければならないかと思います。

反映できていない「山・水・道」のところなんですが大テーマ1つに中テーマ2つというところでそれぞれ独立した部屋になっていますが、他のところは大テーマの中で通り抜けられるというような形を考えていまして、大テーマごとに中を通り抜けて展示を理解して次の大テーマに移っていくというようなことができればと思っているんですが、まだ資料の抽出がバラバラなところがあるので、そこら辺がまだ整合がとれていない状況ではあります。

冒頭にお話をした全部が見渡せるという形は少し置いておきまして、そうはいってもどれくらいのものがあるのか、というようなことは松本城のコーナーからこちらの4つのコーナーに入った時には何となく掴めるような展示になっていくような形で話をさせてもらっています。

後 藤：お客様はこちらが考えているような動線そのままには動いてくれないだろうと思います。下側をずっと順番に回り上にいって順番に回りまた出口に戻ってくるというような動きはごく一部の人だけで、ほとんどの人があっちにいたりこっちにいたりすると

思うので、その辺のところは動線を考えておいた方がいいと思います。

木 下：そこら辺のところはこれから検討していかなければいけないと思っています。

菊 池：大テーマは床に表示するだけではなく人の目線の高さで吊るすことも可能だと思うし、視界を遮らない方法をこれから検討してもらいたいと思います。

木 下：可動の間仕切りは天井までつかないような高さを想定していますが、それがどれくらいの高さが適当なのかも今度検討していかなければと思っています。

菊 池：天井高はどのくらいの高さでしたか？

事務局：一番高いところで6 mメートル強です。

菊 池：天井を張らないとするとランニングウォールは使えない？

事務局：はい。

菊 池：館長がおっしゃったように天井まで届かない高さというようなことになると、どのくらいの高さに設定するかによって間仕切り関係で展示できるものとできないものができてしまう。

ひとつ気になっていたことがあるんですが、「継承」のところの城下町模型はコンクリートではないですね？

事務局：はい。

菊 池：城下町模型の右側が壁との間が狭いのでこれはOKが出るのかどうか気にしていたものですから。

原：よろしいでしょうか。

菊 池：はい、どうぞ。

原：前述しましたが、たぶんどこかで仕切るんだろうと思ったのですがこんなに区切るとは思っていなかったので違和感があります。歴史館もそうですが博物館というのは仕切るのが難しく、真ん中ではなくて横との繋がりをもっと空いた空間でできないかと思うわけです。

これはたぶん、可動して頻繁な展示替えを意識しているのだと思うんですが、そこのところからも仕切りを考えなければいけないのかなと。2つの空間を繋げて1つにすることも考えているんですよ。

木 下：はい。

原：通路側に平行に仕切ることも考えているんですよ。

木 下：長くということですね、はい。

笹 本：話を元に戻してしまいますが、歴史館もそうですがどこも一度作ってしまうとお金の保証をしてくれません。

理想論でいえばどのように担保をとっていくのか、どのくらい毎年やっていけるのかということがとても問題になってくるんだと思います。今までの話としては理想論は出ているけれども、それに対してどういう保証がとれているのか確認しておかないと、更新しやすいのかもしれないけれど更新しませんってことになる。

原：やるならば自分たちで動かせるような汎用性の高い空間を作るしかないと思います。

笹 本：だからこそ初回のときに、例えば「天井高がこれだけだからこれを展示する」とあとから新しい展示を用意するもの考えるのではなくて、全部考えておいた上でやっていかないと展示ケースで全部収納するのは無理だったりするので、その辺も含めて言うと更新しやすいということに対してどういう覚悟とどのような予算措置がされるのかを考えておかないと、途中からあとは学芸員に任せますということになって苦勞するのは学芸員だけになって困るので心配しています。

菊 池：経験上、学芸員たちが展示替えするしかないです。そうするとやはり展示替えできる装置にしておかないと対応できないということは館長は分かった上でやっていると思うんですがランニングウォールも最大値をおさえておかないと。小さいところに大きなものは展示できない訳なのでその中に小さいものを展示する方法はいくらでもある。

おっしゃる通り後から作るのは厳しいものがありますので作るときに、ある程度想定し装置も埋め込んでおかなければいけないと思います。

原：歴史館の経験からすると中テーマはある程度動かせるかもしれないですが、たぶん大テーマを変えられなくなってしまうと思います。そのくらい大テーマを決めるのは難しいです。

木 下：市の内部でもしっかり図って決めている訳ではないですが、いま工事費が11億ということで進めさせてもらっているところですが財源として基金を見ているので、使い切らないで先ほどの中テーマのやり直しの部分に少し残しておいて基金を取り崩してまたやろうかという考え方を持っているのですが、100%くる保証がないことは分かっているんで、そこら辺のところは最初にしなければいけないのか、それでお約束をして財政当局とやっていか

なければならないのかということは課題として持っています。

いまの段階では11億のうち1億を経費として10億でやろうかというイメージを持っています。

原：中テーマはいいと思うんですが、大テーマは位置が決まってしまうと思うんですね。横とくっ付けることなどを考えたら大テーマはある程度固めておいた方がいいと思います、そうしないと全てを動かすと難しいことにもなるので。

木下：すべてを稼働間仕切りにするんじゃないじゃなくてフィックスした方がいいんじゃないかというご意見ですね。

原：中テーマの部分を動かして大テーマを動かしていったら大変なことになるかなと思います。

木下：わかりました。そちらの方ですね。

原：「松本城」は固まっているので大テーマはしっかりと固めてもらいたいと思います。

菊池：可動式の間仕切りにできるところとできないところに分けるしかないですよ。

木下：そんなにフリーにしているもそんなにはやらないよということですね。わかりました。

菊池：展示替えをしていくという方向性がありますが、もっと大きな問題がありますよね。20年前半と後半の展示計画が違うので展示替えがあるわけですが、それは予算的には担保はとれているのでしょうか？

木下：たぶん取ったと言ってもカラ手形でしょうね。

菊池：そういったものも含めてどうするのか道筋を考えていかなければならないと思います。

木下：この計画も20年といいながら20年では済まない部分もあるんだよと。そういうことですよ。

笹本：うちも25年経つので劣化が進んで我々が騒いでも何ともならないので、市の財政機構からすると、おそらくいろいろなことが出てくるのでその辺は少し注意をしておかないと、最終的には学芸員さんたちがやっていくしかない可能性があるのでは。

菊池：展示替えというのは「理想は高く現実は低く」ということになるので絶えず意識して頑張るしかないと思います。

ここにいる方々も10年20年先にはたぶん現職でなくなっているかもしれませんが、問題がいろいろあることを次の世代に伝えていくことが大切だと思います。

常設展示の詳細に対するご意見が他にございましたらお願いします。
ます。

後 藤：例えば「継承」のところの一番奥は家具付きの展示ケースだと思うのですが、これは7メートルぐらいの幅がありますね。展示替えする場合展示ケースの中に入れるのには両側から入るような形になるんですか？

事務局：前面のガラスのところで開けます。

菊 池：重いですよ。前面ですと操作しやすいですか？

後 藤：十分検討されていると思うんですが、特に大きいものになったらこの展示ケースの中に入れ替えというのは意外と大変です。

事務局：参考までに先生方におうかがいしたいのですが、この博物館にいて常設展示を毎回変えていかなければならない課題が出ているんですが、なかなか回っていかないというのが現状で、先生方がいろいろな博物館をご覧になっている中で「ここは資料やテーマが替わっているな」というところがあるとしたならば、イメージ的にどれぐらいの期間や範囲で替わっているのかお聞かせください。

笹 本：うちは頻繁に替えているんだけど、大きなものでないと誰も目を付けません。例えば、小さなものを替えてもうちのところではゾウさんが替わらない限りは替わったようには見えません。逆にいうと古代のような大掛かりな作り付けではないところはどんどん替わって行ってそれが目立つけれども、作り付けのやり方次第ではどんなに替えても目立ちません。努めて我々は替えているつもりなんだけれども評価は低いですし、他所の場合も基本的には目立つものしか見ないので、その辺は難しいと思います。

原：新潟の博物館は結構替えているのに、行ってみても替えているようには見えません。土器が替わっているというのですがケースがその大きさしか入らないからどれも同じだなと。

菊 池：結局はその通りなんです。資料を入れ替えても替わったようには見えません。テーマや部屋全体が入れ替わったりしない限り替わったという印象はなかなか与えられないです。

少し大掛かりになるのかも知れませんが、九州国立博物館の常設展示室が部屋ごとに閉められるようにして頻繁に展示替えをしていますから、どういう風に見えるか見てもいいかなと思います。

事務局：では、やはり当初意図しているように誰かがきて「おお替わったな！」と見てもらえるぐらいのレベルとなると。

菊 池：展示装置を入れ替えるぐらいやらないとその印象は持たないと思

います。

原 : 例えば、重文の資料を出すとか価値で勝負していつも無いものを展示するとマスコミにも取り上げたりするけれども。

笹 本 : 原さんがいわれたように新聞に取り上げられると替わったように見えるんです。だから逆にいうと期間限定にすると何となく替わったような気がするんです。ですからメディアとどのようにして取り合っていくかが次の段階になっていくと思います。モノを替えるよりも、むしろ新聞・テレビ・報道関係とどう連絡を取っていくかが実際問題としては替わったように見えます。

菊 池 : そうですね。そういう意味ではもしかしたら指定物件を展示する。活用ばかりいっていますが（文化庁の）美学は今まで2週間だった公開期間を数か月単位に延ばすことにすでに動いたでしょう。

工夫としては一度そういう展示をパッとやる手もあると思います。

笹 本 : ただ本末転倒で、我々の時代で文化財を消費するのではなく伝えていくのが大前提にもかかわらずそれが崩されるというのは間違いなんです。

菊 池 : その通りです。持続可能な文化財ではなければいけないのに使い捨てにしようとしているんだけれども、それを言葉で分かってもらうのは難しいということがあって、現実にはそういう事態が発生しないとなかなか反省はしないです。

余り言うのと叱られそうですが、本当は守るべき文化庁が先頭に立ってしまっていますので。

原 : 最終的に展示替えは最初につくった展示ケースと展示台で決まってしまう。乗るものの大きさが決まってしまうので。そうすると見たときに替わって見えないというのがあります。

菊 池 : 否定的な意見ばかり出てきているんですが、展示替えができたと見せる工夫は何かありませんでしょうか。

笹 本 : 結局は目につく立体的なものが一番替わったように見えるんです。

もう1つは、さっきのようにそうでない場合には文化財という指定がどのくらい付いているか、そのところに名刺がどのくらい付いているか。逆に市の指定文化財をどんどん作ってそれをこっちで持っていくとか方策を考えないと同じものにしか見えないです。要するに、実質は看板の使い方を少し考えてもらえると、松本は結構良いものを持っているはずなのでその使い方ではないかと思っています。

それから、先ほど原専門員がいわれた「この博物館は松本城だ」という言い方どおりに私の個人的な気持ちとしては、この博物館は日本でも最も古い博物館の1つであり戦役記念というのが表に出ていないという気がするんです。

ここに出てきているのは「継いでつなげて」「戦争と平和」の中に入れ込むのか「近代」の中に入れ込むのかみたいになっていますが、仮に「松本城」が大エースだとすると、この博物館の歴史がどういう形で表に出るのかも重要な要素になってきている気がしています。

今回は大変ありがたいことに、前回私が「模型を生かして下さい」といったらそうしてくれたのですが、やはり博物館の歴史そのものがどういう形で繋がられていくのかが重要なので、個人的にこの現状だと記念館の部分が埋もれてしまっている気がします。が、いかがなものでしょうか。

菊池：そうなんですよね。この博物館は博物館の歴史の中でも非常に早い時期にできた博物館ですからそういう意味では博物館史の中に残る博物館です。

それと、もう1つは先ほどの文化財保護法の問題で言うと、昭和29年の法律改正のときに、その改正に向けて「民俗文化財とは何か」を分かってもらうための講習会をここでやっているんです。

そういう意味でもここは画期になっている博物館なのでどこかに「松本市立博物館」というコーナーを作ってもいいんじゃないかと思います。

笹本：「戦争と平和」はその流れの中から出てきている言葉であって、博物館の歴史がどこかでもっと共存されることによって、「市民の誇り」、「市民の元気」、「うちは日本でも有数の古い博物館を持っている」というその繋がりをもっと意識して欲しいと思います。

もっと極端な言い方をすると、昔「水色の時」でここがよくテレビに出ていきましたが、今年うちは「田淵行男展」をやるつもりです。そういう意味でも、ひと言でいいので何とか博物館そのものの凄さを訴えるようなものを中テーマか小テーマに入れてもらえると、今までの人たちの努力や頑張りが継承されるような気がします。

菊池：このような提案がありましたけれどもいかがでしょうか。

木下：城下町模型をここに出すとしたときに、そのところで少し館の歴史を紹介しようかと変わってきているんですが、最初は1階でやっ

てしまおうかと検討していました。役所の内部ではいい評価は出ませんが私も「函館の次かな」と思いながらやってきているので、それは胸を張って紹介させていただいていいところかなと思います。

菊 池：作られたときの名前が「戦役記念館」でこのネーミングの由来を説明するだけで近代日本の動きが出てくるので、ぜひ個人的ですがどこかで。

実は私も資料を見せていただいて初めて元の名前が「戦役記念館」、「松本民俗資料館」という昔の名前があってこれと「松本市立博物館」とが同じ施設だというのがその時初めて分かりました。なのでもっとアピールしてもいいんじゃないかという気がします。

他にございましたら。ないようですので休憩後に次の議題に入らせていただきます。

4 議題(3) 導入展示及び子ども向け展示の概要について

事務局：(説明)

菊 池：それではよろしく願いいたします。

笹 本：導入展示でお聞きしたいのですが、1枚目に「実際にはシナ材で作られたシナノキをイメージした造作が並木をつくる」とありますが、いま改めてチェックしたんですが松本市の木はアカマツで花はレンゲツツジですよね。そういった市のものを抜いてなぜシナノキにするのか理由をお聞かせください。

木 下：はい。シナノキは香り百選にも選ばれている大名町の街路樹で一番エリア的に身近ということがあります。

笹 本：逆にいうと、シナノキは信州の地名の元になるとか、それからここに描かれているものというのは木がたくさんあるイメージですが基本的に導入展示というのは松本市に関わってくるということになると、むしろ小さな場所じゃなくて松本市を説明する方がいいんじゃないですか？

いまの部分にも松本の観光資源を紹介し云々と付いているわけで、おそらくレンゲツツジが選ばれてくるのは美ヶ原のレンゲツツジだし、松本盆地の中心部分今回のあれで枯れてしまっているかもしれないけれどアカマツがあるので、いまの大名町＝シナノキという説明だと少し弱い気がするんですけども。

繰り返していうと市の紹介がどういうものであるか特徴を持たせるために市の木や花が選定されて一般的なのはホームページなどでチェックするとすぐ出てくるのでこれが云々という訳ではな

いですが、わざわざ市が作って市の歴史が入ってくるとなると植物だとかこういうところに配慮してやった方がいいと思います。

木 下：はい。情報としては入れていかなければならないものだと思います。

菊 池：ということでよろしいでしょうか。他にご意見ありましたら。

後 藤：具体的に真ん中の図の1の「導入展示室」について説明してもらいたいんですけども、左側にある大きな映像や木はどここのところに入るのでしょうか。

木 下：赤丸の矢印で「視点1」とお示しをしております。シナノキは「視点2」と書いたところに情報検索コーナーを見ているところです。

菊 池：「情報検索コーナー」の左側にシナノキがあるってことですね。

このシナノキについては先ほどの回答ですと検討可能と受け止めていいのでしょうか。

木 下：はい。

菊 池：市の木という意見も当然あると思いますので。

先ほどの意見で「松本市立博物館」「戦役記念館」が始まる歴史をやるとすると導入展示室辺りになるのでしょうか、その場合にスペースは取れますでしょうか。

事務局：取れると思います。

菊 池：最終的な設計図ができるときまでには結論が出るよう検討しておいていただきたいと思います。

導入展示室に対するご意見は他にございますか。

櫻 井：「マツもっと展示」のネーミングがすごくいいと思います。子ども向け展示にも行ってみたいと思えるようなアピールするネーミングがあるといいなと思いました。

おうかがいしたいのですが、3年生までとなると、例えば小学校1年生の生活科遠足などでは無理だということでしょうか。

事務局：団体の利用というよりは親子での利用を想定しています。常設展示との関係性を踏まえて考えているんですけども、例えば「白骨温泉の温泉の匂い」は候補として上がるということと、技術的なことは度外視して「匂い」という中で考えているのは「松茸」というところで、例えば四賀地区を意識しながらそういったところを検討中の資料の中では挙げられるかなと考えています。

櫻 井：あくまでも松本の中のということですか？

事務局：そうですね。今の段階では松本の中で考えてみようと思はしていますが、今後詰めていく中ではもう少し広く考えるということも

あってもいいかなと思います。

櫻井：小3から未就学だと結構幅が広くて大変かなとも思います。安全性なども考えられるんですけども、例えば子どもの日に沢山きた時に入場制限するのか時間で入れ替えをするのかなどいろいろな問題が出てくるかと思いますがそういうことも含めてスペース的な割振りとかをお考えいただきたい。

たぶん、親が興味があると子どもさんを連れてくると思います。集団できた高学年の子どもさんは大人用のところへ行って面白そうなところへ広がっていく可能性もあるんですけども、サポートも大切だとおっしゃっていましたが、そういうところも大切だと思います。でも、ワクワクするスペースができ期待しています。

それから松本城について事前に学校にきて下さってクイズとかあったんですがジグゾーパズルで城下の地図を作るとかそういうことを子どもたちが面白がってやっていたので体験を大切にしてもらったり「これ面白そうぞ」という掘みを検討していただき、もっと具体的だとイメージしやすいと思いますのでよろしく願いいたします。

菊池：いまの質問で考えていたんですが、キャパシティをどのくらいに設定するのかがやはり気になります。それは安全とも関わりがあると思います。

もうひとつ大階段があるので子どもたちがとても喜んで走ると思います。この素材は何にしているのか、それから一段辺りの高さをどう設定しているのかがあると思いますが、まだそこまでは細かく詰めていないわけですね。

事務局：階段の高さについては一段辺り20cmで考えています。

菊池：3年生までだとすると高くありませんか？

櫻井：もう少し下げた方がいいかなと思います。素材はクッション性があるものがありがたいと思います。

菊池：子どもさんは想像を超えることをすることがあります。以前博物館にいたときにエントランスのガラスにぶつかった子どもさんがいました。

櫻井：それから角が丸いということも大事だと思います。

笹本：ここは靴を脱ぎますか？

事務局：はい。

菊池：3歳児の幼児さんから小学3年生までということですが、幼児は自分で脱げますか？

- 木 下：親と一緒にいることがあるんですが。
- 笹 本：学校でくればそこは必ず入りますね。
- 櫻 井：入れないんです。
- 木 下：「いいところがあるね、お母さんときてね」という考え方なんですけれども。
- 笹 本：櫻井さんがおっしゃっていることは正しいと思います。うちのところも集団で来て面白かったから親や祖父母を連れてくる例はあるけれども、親が率先してくることは限られているのでひよっとすると集団できた低学年の人たちをここに呼び寄せておいて親を連れてくるというのが沢山きてもらえる可能性が高いと思います。一方で、今のように人数の問題が生じてくるのでその設定は難しいですが。
- 菊 池：考えてみれば幼稚園児がくることも考えられるんですよ。
- 笹 本：他に行くところがないときなどは幼稚園児が来てくれるので。
- 木 下：幼稚園とかそれを許してしまうと、時の記念日の時計博物館が大変なことになったことがあります、とても対応ができないのでそういうことはほとんど見ていません。
- 菊 池：子ども向け展示室なのでそこが辛いところですよ。これは基本方針として決めていいんですか？
- 木 下：さっきのキャパシティ問題だとかそういうことと関係してくるところではありますね。
- 笹 本：単純にさっきの階段のところの材質と掃除の関係。裸足にしる靴にしる掃除をいかにするかということによってきれいにできる体制、クッション性のあるものと掃除との関わりをもっと知りたいと思います。
- 菊 池：あまり柔らかいと歩きにくいです。
- 木 下：他所の博物館で見せてもらっていろいろな課題はつかんでいます。素材の決定には至っていないですけども。
- 笹 本：ここところに直接関係ないですけども、今回の展示の考えだとか冷暖房や掃除のごく当たり前なランニングコストをどう折り合いを付けていくかが大事なので、素材とクッション性その他をしっかりと検討していただければありがたいと思います。
- 原 　：何かあったときのために少なくとも必ず1人はいないと厳しいですよ。それは結構大変かなと思います。
- 菊 池：私もそれを聞きたかったです。要するにここの担当の職員を配置できるのかどうかです。親御さん同伴でくるとは思いますが、誰も

いないと何かあったときに大変なことになるので、ここを担当する職員の負担は大きくなると思います。

後藤：この部屋は親子ではないと使えないですか。例えば、子どもだけできたときは断るのでしょうか。

木下：そのようなことを少し考えています。

まだ決定ではないですが、ありがたいことに毎日くる近所のお子さんがいるかと思っています。占有してしまうかといろいろなことを考え、人を動かしてみても最善の方法を考えています。

後藤：子どもさんにとって、ここは展示より面白いと思います。

木下：「何となくあの子毎日来ているな」でもいいと思うんですが、まだ読めていないところがあります。

原：作り込んだ方がいいのか広いスペースにした方がいいのか、そこは子どもだから難しいところですね。

笹本：原さんのお話の通り、人を配置するとなると、いま人を減らしていく中で非常勤の人だと責任の問題がどうなるのか、学芸員配置を簡単に我々はいうけれども人数を増やしてもらえるかどうかは大変なことだと思うので、そのところはしっかりと考えてもらいたいと思います。

菊池：他にございますか。

笹本：「マツもっと展示」の下のところを説明してもらいたいんですけども真ん中のは外側から見たイメージですか？

事務局：そうですね。リュックを背負った男性の図が街の通り側から見た立面（外部）でその右側は断面（内部）です。

笹本：上のパネルは2m40cmなので、上にくるので遠くから見れば格好がいいけれど近くの人は見づらいんじゃないかという感じと、これは観光客向けでしょうか。もし大人向けであればこの高さでもいいけれども子どもにとっては高いのではないのでしょうか。

木下：場所で使い分けるといってもありますが、カテゴリーは左のところで色分けさせていただいていますが高い所のパネルは字を読むことは厳しいかと思っています。

菊池：いまの件ですが「マツもっと展示」は「情報検索コーナー」のところですか？

木下：そこだけではなく全面です。

菊池：壁面を構成するのはガラスか何かが入っているのでしょうか？

事務局：そうですね。

- 菊 池：わかりました。温湿度調整が大変ですね。
- 笹 本：情報を告知する主体はどこでやるんですか。これはどんどん替えていくことが重要で、そうすると観光課がやるのか博物館がやるのか、実は簡単そうに見えるけれども結構大変なことです。情報を告知する主体はどこでやるんですか？
- 木 下：この図でお示しをしたように作っていくということではないんですけれども、例えば地面との高さの関係とかいろいろな条件があるので、全部がこういう形になるということではなく、こういう要素でそれぞれのところを構成していくつもりです。
- 笹 本：それは分かるけれどもサイネージを管理して情報を流したりするのはどうなっているのかということが見えてこない、いろいろなものを作りましたで終わってしまうことがあります。
こういうのって変化させていかなければいけないので、その辺がどうなっているのか知りたいです。
- 木 下：まだ調整はしていません。
- 菊 池：どういう条件でここで流すのか、誰が情報の取りまとめをするのかというのはやはり大きな問題だと思います。
情報提示の方法はペーパーなのかモニターなのか別のものなのか、それによってもやり方が変わってくると思います。
- 木 下：様々なことを想定しておりますが「テーマ④」とかというのは学校さんが見に来てくれると感想文を寄せて下さったりするじゃないですか。そのようなものを出したり、博物館を利用して下さったあらゆる方々からの情報や博物館が発信した情報などをテーマ・カテゴリーごとにある程度整理していかないと、受け取る側も大変かなと思うのでそういう形で出そうと思っているんですけれども、笹本委員からあった観光の情報についてはどうかということとは未整理です。
- 菊 池：いずれにしても、いまの館長の説明ですと、流す情報を管理するのは博物館という認識でいらっしゃるかと理解していいですか？
- 木 下：そうですね。「⑤の観光情報」以外はそのつもりでいます。
- 菊 池：観光課のテーマは、情報は観光課けれども流すのは博物館がやるということですか？
- 木 下：そうなると想定しています。
- 笹 本：そうなってくるとこの壁面の管理って学芸員にとっては大変な労力がかかると思います。
- 事務局：外観もありますので、その辺はこれから考えたいと思います。

原　：人通りがある東側に壁がないですね。

菊　池：この壁は南側ですね。当然見えなければいけないから透明ガラスだと冬はいいのかも知れませんが夏や秋にかけては温度が高くなり過ぎて湿度も上がって大変なことになると思うので、全体に及ぼす影響を考えなければならぬと思います。外から見えなように壁を作る訳にはいかないから相当な電気代がかかるのではないのでしょうか。

他にどうぞ。

笹　本：市長は松本の偉人をもう少しとっていますが、松本の偉人を取り上げることは意識していませんか？

木　下：今のところそのような意識はないです。展示にしていくとモノがどうしても。私どもの制約があるとしたら、解説冊子みたいな媒体の方が適当かとか、もちろん扱わないということはないですけれども、どうやって情報をお示しするのがいいのかは考えて展示というモノがないと難しいところがあるので「この人は松本に外せないね」という形になったらどうなのかというところがあるので、やり方は十分に検討していかなければいけないかなという気がします。

笹　本：飯田市美術博物館はとても感動的です。最初から「菱田春草」と「田中芳男」をやるんだという目的意識があって、しかも「田中芳男」には資料が全くなくて寄託されたスプーン1つから現状まで集めた訳です。

博物館の大事な要素として資料の収集の問題があって、そうすると松本市の博物館はこれからどうなっていくかということが、いま言った展示それから今後に関わってくるのではないかと思います。いまの状況だと「集まってきたものを展示します」という状況になってくると思うんだけど、市民にとって大事な人の資料を集めていくことが前提になってくるはずなので、その展示そのものというよりも将来に向けて博物館の姿勢としてどういう人、あるいはどういうものを集めていくかということはどこかで考えていかないと展示替えにも関わってくるのではないかと思います。

菊　池：博物館の本来のあるべき姿を示すことになるんじゃないかと、あるべき姿とは調査・研究があってそれを展示に反映されるという考え方が一番現れる部分になりますので。

他にご意見はありますか。

- 原 : 南側に壁がありますが、人通りがある東側にはできませんか？
- 木 下 : 東側は相当セットバックしている状況です。そこら辺のところはまだ動いていますけれども、東側の大名町の方に顔をしっかり向けられるようになればそちらの方も考えておかねばという認識は持っています。
- 菊 池 : 説明を聞いていて気付いたんですが、展示についてはどのくらいの段階になっているのでしょうか。実施設計が本年末ということですが、作業としては現在実施設計に入っているのか前段階なのか教えて下さい。
- 木 下 : きちんとお伝えしていなかったと反省しておりますが、当初お話をしたのは11月末で設計を上げるとご説明しましたが、その後少し間に合わないということで1月末に延ばしております。今月末の基本設計の提出に向けて最終の調整を進めていただいている段階です。そのため、この時期にもかかわらず図面が資料としてきちんと上がってきていないんですけれども、基本設計の最終段階というのが現時点です。
- 菊 池 : それが出ると実施設計に入るのは引き続きということですか、それとも4月になってからということですか。
- 木 下 : 基本設計が出てそれから意見の集約やいろいろなことをして反映しながら最終的な基本設計の調整をさせていただいて、それで実施設計に移っていくというラインです。
- 菊 池 : もう1つなんですが、松本市基幹博物館展示計画の日付はいつ付けになるんですか？
- 事務局 : はい。一旦7月末という形でふらせていただいて、そこから随時設計の進捗に合わせて常設展示の調整を見直していこうと考えています。
- 木 下 : 会議をする度に中身は変わっていくのは当然なんですけど、私どもの展示業者さんに「こういうことをお願いします」とお願いしたんですがなかなか整わないのでいつまでも引きずっている感じになっています。
- 菊 池 : これに絡めて言えば、日付は基本設計・実施設計よりも前になっていないとまずいのかなと思ったものですから。
- 木 下 : 基本設計を始めるときに指示書として出すということで作っている書類でございます。
- 後 藤 : これからこの会はどのように進んでいくんですか？
- 木 下 : 設計の段階においては少し頻度は減っていく？

事務局：はい。とりあえず今月末で一旦終了になります。次回は成果品が出てきますので展示のほとんどの部分についてはお示しをさせていただきますと思います。

菊池：そのときには基本設計書として読むことができる状態ですか？

事務局：はい。そのような感じですか。

後藤：それでここは終わり？

事務局：実施設計終了までお願いしていきたくて考えております。

後藤：展示の具体的な内容をここでほとんど話が出てきていません。それを少しやった方がいいと思うので、それが次の基本設計が出てきた段階での話になるのか、もう少し継続してやっていくのかその辺の見通しはどうですか？

事務局：次回の基本設計の段階ではたぶんそこまでお示しをするのは難しいかと思っております。いずれにしても実施設計の終了まで先生方にはお付き合い願いたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

菊池：実施設計の段階になって初めて資料の確定が図られると思うので、ここで具体的な資料というのは実施設計を作る段階であることにはなるのではないかと思いますけれど。

木下：こちらからのお願いですがこちらのリストの方を少し加えさせていただきますが、「このテーマだったらこういうものがあるんじゃないか」、「こういうものがあって然るべきではないか」というようなことはまたいつもお願いをするところなのですが、ご意見をいただき会議の場ではなくても結構ですので、お気付きのときにお知らせいただければありがたいです。

菊池：わかりました。もうよろしいでしょうか。

それでは用意された議題は終わりましたので事務局の方にお返しいたします。

事務局：本日は長時間に渡りご審議いただき誠にありがとうございました。ただいま申し上げた通り次回は基本設計の成果品をお示ししながらいろいろとご意見をいただきたいと思いますので、よろしくお願いたします。

以上を持ちまして「第4回松本市基幹博物館建設検討委員会 展示専門部会」を閉会いたします。

本日はありがとうございました。